

平成 30 年 3 月 27 日

## 鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）留学終了報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

## 記

## 1. 報告者情報

所属/学年	教育学部/4年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2019/03/30		

## 2. 留学の概要

留学期間	開始年月日	2017/06/03	終了年月日	2018/01/07
留学のタイトル	オーストラリアの小学校教育を学ぶ			
留学の目的と概要（実践活動部分には、下線を引いて下さい）（700字程度）				
<p>今回の留学は実際にオーストラリアの小学校を、<u>JTA(Japanese teaching assistant)</u>として訪ねる。そこで、その小学校で、<u>第 1 外国語として教えている日本語の現地の先生のアシスタントとしてボランティアを行う。現地の先生とともに、子どもたちと接しながら授業を行う中で、日本の小学校との授業方法の違いや、子どもたちの発達の違い、オーストラリア特有の教育についても学ぶことができる。実際には、授業準備や教材開発の手伝いや、授業中のアシスタント活動を行う。日本の小学校での授業準備や教材開発との共通点・相違点は何なのか、授業における教師の工夫や、発問、授業の進め方はどのようになっているのか</u>といったことも学んでいくことができる。</p> <p>また、宿泊はすべてホームステイで学校の先生や子どもたちの家庭に滞在する。一緒に生活を送る中で、日常会話などを通して、コミュニケーション能力やリスニング力、スピーキング力を育てていくことができる。また、自分の語学力の向上につながるだけでなく、家庭での子どもの姿を見ることができる。学校にいる時とは違う子どもの言動、態度などを見ることで、その子どもの違った一面を知ることができ、学校で見ていることがすべてではなく、もっと内面的なところまで見る必要性に気づくことができるのではないかと考える。これは、今回のオーストラリアの小学校だけでなく、日本に帰って自分が小学校の先生になったときにも言えることだと思う。そういった意味でも、この留学は、教師になるという私の将来にも深くつながるし、ここでの学びを大きく活かすことができると考える。</p>				

## 3. 受入れ機関情報及びスケジュール

## (1) 受入れ機関情報

	1ヶ所目の機関	2ヶ所目の機関	3ヶ所目の機関
国・地域	オーストラリア		
都市名	キャンベラ		

機関名 (英語)	Fraser Primary School		
機関名 (日本語)	フレザー小学校		
受入れ 機関 URL	http://www.fraserps.act.edu.au/		

(2) 留学期間中のスケジュール 留学月数 ( 7 ) ヶ月 / 授業料申請 (有・無○)

年 月	留学先機関	国・地域	主な活動
2017年 6月~12月	Fraser 小学校	オーストラリア	JTA(Japanese Teaching Assistant)

(3) 参加したプログラム (有・無○) (複数選択可)

本学の協定校交換留学	名称記入	本学の協定校交換 留学以外のプログラム	名称記入
本学以外の機関による留学プログラム	名称記入		

4. 留学の成果及びその測定方法 (300字程度)

成果発表 (論文、作品等)	○	単位取得		外国語能力		その他	○
留学先から帰国 1 ヶ月後、成果発表会を鹿児島市の公民館もしくは鹿児島大学で 2 回行う。鹿児島県の小・中学校、高等学校の教員や将来学校の先生になりたいと考えている学生に、オーストラリアの小学校に行って学んできたことを発表する。具体的には、プレゼンテーション形式でオーストラリアでの学校教育はどういうものだったか、日本の学校教育とはどのような違いがあったか、日本はこれからどのような学校教育、主に英語教育を進めていくべきと考えるかなどを発表していく。その後、質疑・応答も含め全体で交流していくことで意見交換をし、今後の鹿児島県の学校教育をより良くしていくために考えを深めていく。							

※当てはまる項目に○を付し、具体的に説明して下さい (複数回答可)

5. 上記 4. も含め、留学の目的がどのように達成できたか、留学で得たことは何か記述してください。

上記の活動を行うために、活動を行った小学校での観察記録や調べたことをできる限りノートにまとめた。内容は、教科授業を観察した時の記録、オーストラリア教育のカリキュラムについて調べたこと、現場の先生方及び、小学校 5/6 年生を対象に行ったアンケート内容とその結果についてである。教科授業の観察記録については、分単位でどのような活動を行っているのか、どのような教材・教具を使用しているか、教師はどのような発問を投げかけ、それに対して子どもたちがどう反応しているかなどできるだけ詳しく記録し、また疑問に思ったことはノートにメモし、授業終了後、担当の先生に話を聞き、記録することができた。オーストラリア教育のカリキュラムについては、特に興味を持った「算数科教育」について学校の資料室で調べ、ノートにまとめた。

また、学校教育に関する面だけでなく、日常生活を送る中でも得たものはあった。ホームステイをするうえで、自分の部屋にこもるのではなく、ホストファミリーと会話をしたり、家事を手伝ったりすることで、コミュニケーション力、スピーキング力、リスニング力も以前より身についたと思う。また、家庭内での子どもと関わることで、学校では見せない一面を知ることができたり、学校と家庭とで子どもが抱く気持ち、心情の変化についても少し触れることができた。

(500 字程度)

## 6. 留学後に行う鹿児島地域を活性化する活動について述べてください。(500 字程度)

留学後に行う地域活性化活動については、まず報告会を行う。報告会の内容としては、今回の留学を通して学んだことを鹿児島の学校教育にどのように活かせるかを踏まえながらプレゼンテーションを行う。オーストラリアの教育制度、カリキュラムがどのような仕組みになっているかを前提として踏まえたうえで、①オーストラリアの小学校がどのように第 1 外国語(日本語)を教えているのか、②私たち JTA(Japanese teaching assistant)をどのように効果的に活用していたのか、③また第 1 外国語だけに限らず、他の教科を教えるにあたってどのような工夫や特徴が見られたかについて発表する。①については、これを鹿児島の小学校で行う外国語活動の教授法の参考にすることができ、②については、鹿児島の小・中学校及び高校で外国語活動または英語の授業における ALT のより効果的な活用の仕方の参考に、③については①②のような英語の授業だけに限らず、鹿児島の学校教育全般において、子どもたちにどのような力を身に付けさせようとするのか、またその方法について一つの案として提供することができると考える。

また、報告会を通して実際に現職の先生方とお話をしたり、意見を交換したりすることによってより具体的に鹿児島の学校教育のこれからについて考えることもでき、将来教師になりたいと思っている学生と交流することで、これからどのように鹿児島の学校教育に貢献できるかを一緒に考えていくことも可能である。

## 7. 留学を今後の自分の生き方にどのように活かすか、留学成果を活用して将来鹿児島地域に貢献できることは何か記述して下さい。(500 字程度)

私は今回の留学の経験を自分が将来教師になったときに活かしたいと思う。私は大学三年の時 1 か月間小学校で教育実習を行った。その時は、ただ指導案通り、教科書通りの授業をしようとしてか考えておらず、子どものことを考えるような余裕はなかった。だが指定の教科書のないオーストラリアの小学校でボランティアをしながら授業のアシスタントをしたり観察をしたりする中で、教師が子どもたちに教える上で子どもの学びにつながるような授業をすることを第一に考えていることや、子どもたち一人ひとりに合った授業方法を取り入れていることを学んだ。それは、ただ単に指定の教科書がないからという理由だけではないはずである。だから、これからは私も日本で教科書を使いながらも、それだけにとらわれず常に子どものことを考えながら授業をしていけるようになりたいと思う。

また、自分自身の教師としての在り方に関わらず、鹿児島のこれからの学校教育をどのようにしていくかを、公開研究会などを通じて鹿児島の先生方と交流を深めながら、一緒に学んでいくことができると思う。グローバル化が進んでいくこの社会で、何を子どもたちに学ばせたいのか、どのような力を身に付けさせたいのか、これらについて海外の学校現場で学んできたことを踏まえ、これから社会に出ていく子どもたちのために鹿児島の教員全体で考えていくことができると思う。

平成 30 3月 27日

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）  
留学後地域活性化報告書

鹿児島大学長 殿

鹿大「進取の精神」支援基金学生海外派遣事業（長期派遣留学）実施要項に基づき、下記のとおり報告します。

## 記

## 1. 報告者情報

所属/学年	教育学部/4年	性別	女
卒業/修了 予定年月日	2019/3/30		

5. 留学後の鹿児島地域を活性化する活動の概要を、留学の成果との関係がわかるように記述してください。(700字程度)

【活動のタイトル】JTA(Japanese Teaching Assistant)としてのボランティア活動

【活動の期間】 2017年 6月 3日～ 2017年 12月 15日

【活動の概要】

留学先から帰国1ヶ月後、成果発表会を鹿児島市の公民館および鹿児島大学で計2回行った。鹿児島県の小・中学校、高等学校の教員や将来学校の先生になりたいと考えている学生に、オーストラリアの小学校に行って学んできたことを発表した。具体的には、プレゼンテーション形式でオーストラリアでの学校教育はどういうものだったか、日本の学校教育とはどのような違いがあったか、日本はこれからどのような学校教育、主に英語教育を進めていくべきと考えるかなどを発表した。その後、質疑・応答も含め全体で交流していくことで意見交換をし、今後の鹿児島県の学校教育をより良くしていくために考えを深めた。

私は実際にこの留学を通して、ある小学校のタイムスケジュールや、授業で使われている教材や教具、教師と子どもとのコミュニケーションの形態など、オーストラリアの教育に関する様々なことを学んだ。その中でも私が特に興味を持ったことについて発表した。具体的な内容は、「オーストラリアの算数科教育について」である。なぜ私が今回、数ある教科の中で“算数科教育”に焦点を当てたかということ、いくつかの教科を観察した中で特に日本の教科教育との違いが見られたからである。それは、教科書の用語を覚えさせる日本の授業方法に対して、その用語について子どもたちの言葉で表現させ、理解を深めるというものであった。例えば、角度の単元を扱う時、日本では「～を角という」

というように“角”という用語を覚えさせるのに対し、オーストラリアの小学校では、どのようなものを角というのか、その定義を自分の言葉で考えさせるという授業方法を取り入れていた。そして、そのような授業内容をぜひ日本の教員の方々や学生の皆さんに知ってもらいたいと思ったからである。また、そのようなオーストラリアの教育を観察して、それがこれからの日本の教科教育にどのように活かせるかを自分なりに考察し、生きる力を重視した汎用的能力を養う授業の重要性について発表した。

6. 鹿児島地域を活性化する活動の成果と今後の課題と展望について述べてください。(700字程度)  
今回の成果発表会には、大学の先生方、現職の先生方、教員志望の学生にご参加いただいた。全体の発表の内容としては、この留學生活で学んで来たことの中で、鹿児島の学校教育の一助となる情報提供であったが、その中でも私は、JTAとして活動していた日本語の授業についてではなく、他教科(算数)の授業に焦点をあて、発表を行った。

オーストラリアの学校教育は日本の学校教育とは大きく異なる点が二つある。一つ目は、国指定の教科書というものは存在せず、教師は個人でオリジナルの教材を作ることが可能であるということ。そのため、教師は子どもたち一人ひとりのニーズにあった教材づくりが可能となる。

二つ目は、電子黒板や電子端末などの電子教材を用いた授業を行っているということ。日本ではまだほとんどの学校が黒板を使用しているが、オーストラリアではほとんどの学校が電子黒板を使用しており、また国(政府)から子どもたち人数分の電子端末(ノートパソコン)が支給されているため、各教科の授業で使用することも可能である。そのため、授業内容をクラス全体で共有することもでき、またビデオ、図、視覚教材などを表示することも可能である。

しかし、このような方法を日本の学校教育でも取り入れようとするのは不可能である。そもそも学校教育というというのは、各国の社会的背景があり、それを踏まえた上で国はその国に応じた教育制度を確立している。そのため、今回私が挙げた方法が必ずしも日本の学校教育にとってプラスになることも限らない。だからこそ、今回学んで来たことを日本の学校教育にあった形で実践していくにはどうすれば良いのかを、今後の課題として試行錯誤し続けていかなければならないと思った。

また、これから日本が迎える社会というのは、変化が激しく情報化も進展し、益々多様化していく社会である。そのような社会を生きる子どもたちに必要とされている力は、教科教育における知識・技能のだけでなく、社会を生きていくうえで必要な思考力や判断力などの汎用的能力も学校教育の中で養っていかなくてはならないと思う。